様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月 １２ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００００６５

研究課題名（和文）古インド・アーリヤ語歴史文法動詞篇

研究課題名（英文）Historical morphology of the verbs in Old Indo-Aryan

研究代表者
後藤　敏文（Goto, Toshifumi）

東北大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：４０２１５４９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：古インド・アーリヤ語の動詞組織について，具体的語形と用例とを検証し，活用組織，語形成の原理，機能を分析し，歴史的展開を跡づけた。ヴェーダ語から古典サンスクリットに至る記述文法と歴史文法とを兼ね備え，文献学的研究にも資する記述に努めた。インド・ヨーロッパ祖語，インド・イラン祖語に遡って起源と改変とを歴史的に分析し，パーリ語を始めとする中期インド・アーリヤ語への展開にも留意した。副詞，前置詞，間投詞等をも扱い，先行の研究計画において完成した名詞，数詞，代名詞に関する部分と合わせ，古インド・アーリヤ語形態論の出版原稿を完成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
古インド・アーリヤ語（広義の「サンスクリット語」），イラン諸語（古・新アヴェスタ語，古ペルシャ語など），インド・ヨーロッパ語比較言語学の分野には，過去の欧米書の翻訳・紹介を超えた今日的参考書がない。今回完成した出版原稿はこの課題に答えるものである。特にインド・ヨーロッパ語比較言語学が達成した最新成果に基づいて書かれている点では，英語による先行版（Goto,Wien 2013）以外には類書が無く，画期的なものとなろう。記述的・歴史的に厳密な文法書を提供すべく，英文版を大幅に増補改良して，実際に文献（ヴェーダ，古典サンスクリット，中期インド・アーリヤ語，仏典）を扱う際の参考書となるよう努めた。

研究成果の概要（英文）：In this project, I verified the forms and their occurrences of the Old Indo-Aryan verbs and analyzed the system of their flexion, principles and functions. I traced the origins of forms and systems in Proto-Indo-Iranian and Proto-Indo-European and elucidated the developments in Old Indo-Aryan. Also, the development into Middle Indo-Aryan such as in Pali were took into consideration. Indeclinable words (adverbs, preposition, interjections) were also treated. I could thus complete a manuscript for a monograph of the historical morphology of Old Indo-Aryan language together with the parts about nouns, pronouns, and numerals, which have been concluded in my previous project.

研究分野：インド学，インド・ヨーロッパ語比較言語学

キーワード：インド・アーリヤ語　インド・ヨーロッパ語比較文法　インド・イラン語歴史文法　ヴェーダ　アヴェスタ　サンスクリット語　パーリ語　歴史文法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1.　研究開始当初の背景

古インド・アーリヤ語（広義の「サンスクリット語」）については，今日的水準で書かれた歴史文法書は存在しない。前回の研究計画（「古インド・アーリヤ語歴史文法形態論」の作成，2014–2017）によって完成した名詞，代名詞，数詞の部分に加えて，残された動詞，不変化詞の部分を完成し，全般的解説を補って，古インド・アーリヤ語歴史文法を出版可能な形で完成すべく試みた。また，イラン諸語（古アヴェスタ語，新アヴェスタ語，古ペルシャ語を中心に），インド・ヨーロッパ語比較言語学の分野にも，英独仏語からの，もはや今日的水準とは言えない翻訳・紹介を超えた日本語の参考書がない。古インド・アーリヤ語を歴史的に遡って分析記述する際に，この欠乏をも補うべく解説を試みる必要があった。このような背景から，出版原稿を整えることを目指した。特に，インド・ヨーロッパ語比較言語学が今日までに達成した成果に基づいて書かれたという点では，本研究者が英文で出版した先行版（ウィーン 2013）以外には類書が無い。これを基にしながらも，大幅に改良増補し，術語・用語等に詳しい解説を加え，入門の役割をも果たすような記述的と同時に歴史的な，正確な文法書を提供する必要があった。実際に文献（ヴェーダ，古典サンスクリット，中期インド・アーリヤ語）を扱う際に参考書となるような情報も欠かせない。

2.　研究の目的

古インド・アーリヤ語（「サンスクリット語」）の動詞組織について，具体的語形と用例とを収集検証し，活用組織，語形成の原理，機能を分析し，歴史的展開を跡づけることを目指した。ヴェーダ語から古典サンスクリットに至る記述文法と歴史文法とを兼ね備え，文献学的研究にも資する記述に努める。インド・ヨーロッパ祖語，インド・イラン祖語に遡って起源と改変とを歴史的に検証し，パーリ語を始めとする中期インド・アーリヤ語への展開にも留意する。副詞，前置詞，間投詞等をも扱い，先行の研究計画において完成した名詞，数詞，代名詞に関する部分と合わせ，古インド・アーリヤ語形態論の出版原稿の完成を目指す。

3.　研究の方法

これまで 30 年以上に亘って収集し，動詞語根毎に記録収集してきた語形，在証箇所，研究文献の一覧を基に，動詞の組織と構成原理とを分析して記述し，動詞活用の諸カテゴリーを適切に分類配置し，当該語形を確認検証の上，提示する。既存の文法書（Whitney, Macdonell, Renou, Wackernagel 等）が用いてきたカテゴリーは，今日までにインド・ヨーロッパ語比較言語学の細部において達成された見地からすると，大幅に修正改良が必要である。本研究者は既に Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background (Wien 2013) において，最新の枠組みの提示を試みたが，これを基に，一々の事項，中身を詳細に検証し，改良を加え，より詳しい分析と説明を試みる。個々の語形の在証箇所は Boehtlingk–Roth の辞書，Vedic Word Concordance，各種の索引，研究書などを総動員し，自らその都度原典に当たって解釈し確認する。また，申請者自身の原典研究から直接得られた語形，箇所も多い。二次文献については，必要に応じてその都度確認に努める。

4.　研究成果

(1) 上述のように，古インド・アーリヤ語（広義の「サンスクリット語」），イラン諸語（古アヴェスタ語，新アヴェスタ語，古ペルシャ語を中心に），インド・ヨーロッパ語比較言語学の分野には，現代の水準で書かれた適切な参考書が存在しない。本研究課題で完成できた出版原稿はこ

の課題に答えるものである。特に，インド・ヨーロッパ語比較言語学が今日までに達成した成果に基づいて書かれたという点では類書が無く，画期的である。記述的と同時に歴史的な正確な文法書を提供すべく，英文版を大幅に改良増補して，実際に文献（ヴェーダから古典サンスクリット，パーリ，アルダマーガディー，仏典）を扱う際に参考書となるものとなっている。本邦の将来の研究者に期待するものである。

(2) 古インド・アーリヤ語形態論とその歴史的背景

前回の研究計画（「古インド・アーリヤ語歴史文法形態論」の作成，2014−2017）と合わせて 220 頁（1 頁 40 字×40 行）の出版原稿を完成した。さらに索引（50 頁以上）がこれに加わる。目次と一部を抜粋して成果報告に代える。

＜目次＞

0. 表記，略号，基本概念の説明 ── **0.1.** 表記に関する注記 ── **0.2** .記号 ── **0.3.** 略表記 ── **0.4.** サンディ sandhi と「ルキ」ruki，語形表記の原則について ── **0.5.** ラリンジャル laryngeal，*seṭ, aniṭ* ── **0.6.** BRUGMANN の法則

1. 古インド・アーリヤ語とその文献 ── **1.1.** インド・ヨーロッパ（印欧）語族 ── **1.2.** イーラーン ── **1.3.** インド，インド・アーリヤ語 ── **1.4.** 古インド・アーリヤ語の諸文献 ── **1.5.** サンスクリット語 ── **1.6.** 中期インド・アーリヤ語，パーリ，仏教梵語 ── **2.** 基本的参考文献

2.1. 文法書 ── **2.2.** 辞書 ── **2.3.** その他，常に参照すべきもの

3. アップライトとアクセントに基づく活用パターン

（**4.** 名詞 nouns, **5.** 代名詞 pronouns, **6.** 数詞 numerals の部分は前回の研究計画において作成。）

7. 動詞 verbs

7.1. 一般的説明 **7.1.1.** 態 diatheses (active と middle) ── **7.1.2.** ── 時間的活動様態 Aktionsarten，（内的）動作様態 Verhaltensarten，支配様態（外的動作様態） Rektionsarten ── **7.1.3.** アスペクト（観），aspects, suppletion ── **7.1.4.** アスペクト語幹 aspect stems; present stem formations ── **7.1.4.1.** 現在語幹 present stem formations

7.2. 人称語尾 verbal (personal) endings ── **7.2.1.** active 語尾 ── **7.2.2.** middle 語尾 ── **7.2.3.** PII（Proto-Indo-Iranian）語尾 ──**7.2.4.** PIE（Proto-Indo-European）語尾

7.3. 法 moods ──**7.3.1.** 言及法 injunctive ── **7.3.2.** 接続法 subjunctive，Konjunktiv ── **7.3.3.** 願望可能法 optative，アオリスト optaive，希求法 precative ── **7.3.4.** 命令法 imperative

7.4. 現在組織 present system ── **7.4.1.** 幹母音語幹 thematic present stems:［Th. 1］–［Th.7］── **7.4.2.** 非幹母音幹活用 athematic present stems ── **7.4.2.1.** 非幹母音幹語根活用 athematic root stems［Ath. 1］── **7.4.2.2.** スタティーヴ語形を示す現在語幹“stative” forms［Ath. 1.1.］── **7.4.2.3.** acrodynamic 語根活用［Ath. 2］── **7.4.2.4.** 重複現在語幹 reduplicated stems［Ath. 3］── **7.4.2.5.**鼻音現在語幹 nasal presents［Ath. 4.1］~［Ath. 4.3］

7.5. アオリスト組織 aorist system ── **7.5.1.** 非幹母音幹語根アオリスト athematic root-aorists ── **7.5.2.** 幹母音幹語根アオリスト thematic root-aorists ── **7.5.3.** 重複アオリスト reduplicated aorists ── **7.5.4.** *-s-*アオリスト類 sigmatic aorists:［1］*-s-*,［2］*-iṣ-*,［3］*-siṣ-*,［4］*-sa-* aor. ── **7.5.5.** Medio-passive アオリスト ── **7.5.6.** 迂説アオリスト periphrastic aorists

7.6. 完了組織 perfect system ── **7.6.1.** 語幹と語尾 ── **7.6.2.** 法 moods（subjunctive，optative，

imperative）── **7.6.3. 過去形，インジャンクティーヴ** perfect ── **7.6.4. 完了分詞** participles ── **7.6.5. 迂説語形** periphrastic perfects

7.7. **二次的現在語幹** ── **7.7.1. 未来語幹** future I ── **7.7.1.1. 迂説未来形** future II ── **7.7.2. 意欲語幹** desiderative ── **7.7.3. 反復語幹** intensive ── **7.7.4. 使役語幹** causative ── **7.7.5. 受動語幹** passive ── **7.7.6. 名詞起源語幹** denominative

7.8. **動詞組織に属する名詞その他の派生形**

7.8.1. **不定詞** infinitives: ［1］*-dhyai*，［2］*-e*，*-ai*，［3］*-tave*，*-tavai*，［4］*-táye*，［4.1］*-tyái*，［5］*-aye*，［6］*-ase*，*-se*，［7］*-mane*，［8］*-vane*; ［9］*-as*，［10］*-tos*; ［11］*-am*，［12］*-tum*; ［13］*-sáni* ── **7.8.2.── 分詞** participles（*-ánt-*/*-nt-*/*-at-*; *-māna-*，*-āná-*/*-āna-*）── **7.8.3. 動形容詞** verbal adjectives : *-tá-*，*-ná-* ; *-tá-vant-* ── **7.8.4. 動作者名詞** verbal agents ── **7.8.5.ジェランディーヴ** gerundives（**未来必然分詞**）: ［1］*-ya-*，［2］*-ā́y$_i$ya-*，［3］*-en$_i$ya-*，*-enya-*，［4］*-tva-*，［5］*-tavyà-*（*-tav$_i$ya-*），［6］*-aṇī́ya-* ── **7.8.6. 絶対詞** gerunds（absolutives）:［1］*-tvā́*，［2］*-tvā́ya*，［3］*-tvī́*，［4］*-yā̆*，［5］*-am*

7.9. **動詞前置詞，副詞的前置詞** preverbs，adverbial prepositions

8. **副詞，不変化詞** adverbs，indeclinables ── **8.1. 名詞修飾的前置詞** adnominal prepositions ── **8.2. 副詞接尾辞** adverbial suffixes:［1］~［12］── **8.3. 副詞的名詞格形，名詞格形起源の副詞** adverbial case forms ── **8.4. 副詞的迂説表現** ── **8.5. 小辞** particles ── **8.6. 副詞の使用について** adverbial constructions ── **8.7. 間投詞** interjections

文献 bibliography－ **索引** indices: **事項索引** subjects and grammatical elements，**語**，**語形索引** words and forms; **言及箇所索引** passages

＜原稿見本＞

7.3.1. 言及法（インジャンクティーヴ，injunctive，Injunktiv）注 1)

現在語幹，アオリスト語幹，場合によっては完了語幹（その場合には，完了形から作られた過去形の語幹を前提）に 2 **次語尾を付して作られる。従って，人称と数のみを表示する。動詞語幹の意味に時間の限定や発言者の態度表明を加えない表現法である。注** 2) **言及法の基本は，ひとに何かを報告するのではなく，事柄に「言及」（**mention，Erwähnung**）することにある（**“memorative”**）。一般的状況，時の制約を超えた事実，真実，人や物の性格付け，神話や誰もが知っている事柄への言及に用いられる。禁止の小辞** *mā́***「するな」とともに用いられると，禁止（**prohibitive**）を意味する。動詞が現在語幹ならば中止の要請（**inhibitive**），アオリストならば，そもそもその行為・状態が起こることを否定する一般的禁止，防止（**preventive**）を意味する。非幹母音幹語根アオリストと** medio-passive **アオリスト** 3 **人称複数形の** indicative **と** injunctive **間のアップラウトの相違については** 7.3. **参照。**

注 1) Karl HOFFMANN Der Injunktiv im Veda. Eine synchronische Funktionsuntersuchung，Heidelberg 1967 **は，**RV **を中心に，この法に関わる語形と機能とを文献学的，言語学的にはじめて解明した。これによって，動詞活用の構造全体を見直すことが可能になり，インド・ヨーロッパ語比較言語学に座標軸の転換をもたらした。（出版は** 1967 **年であるが，**1950 **年に提出された教授資格論文に基づく。出版以前に幾人かの研究者に利用されていた。例えば，**MEID Die idg. Grundlagen der air. absol. und konj. Verbalflexion，1963，90−99, VII **など。その他，**Der Injunktiv p.8 n.1 **参照。）また，**RV **はホメーロスのような報告の文による「物語」ではなく，民族，部族の共通体験や神話に言及する** injunctive **による文学と位置づけられることとなった。**THIEME Kleine Schriften II，1995，1216f.（Erlangen **で開催された第** 20 **回** Deutscher Orientalistentag 1977 **の基調講演に基づく）**

参照。「インジャンクティーヴ，injunctive，Injunktiv」という命名は禁止や指令を意味するかのような誤解を与えかねないが，命名時の歴史を背負っているのであろう。命名問題については HOFFMANN 同書 28 n.3，279。HOFFMANN は，同書では中心的意味要素を Erwähnung「言及」と捉え，“Memorativ”（「言及法」，「想起法」あたりか）を提唱しているが，授業その他では“Primitiv”（「基礎法」か。SCHWYZER に遡る，HOFFMANN 同書 28 n.3 参照）を推奨していた。しかし，Injunktiv が意味の取りづらい語であることがかえって単なる名付けに相応しいとして，伝統的な“Injunktiv” を一貫して用いていた。便宜上「指令法」と訳されることもあるが，ここでは「言及法」とするか，injunctive（略 inj.）をそのまま用いることとする。

注 2) 日本語の裸の動詞終止形表現と比べられる点がある。日本語で，時の指定，話者の態度表明などが加えられない動詞終止形とそれに類する語形が用いられるのは，むしろ特殊な場合である。ひとが「雨が降る」といった場合，発語は宙に浮いてしまい，聞き手は理解を限定できない恐れがある。終止形表現の代表例は: 1) 履歴書（名詞文と交替可能なことに注意）や料理教本など，情報の中身だけが重要である場合，2) 動作に伴う発語，「この本を君にあげる」など（HOFFMANN が 251 頁以下に挙げる Koinzidenzfall に相当），3) これから起こる事柄：「君も行く？」「僕も行く」，先に挙げた「雨が降る」など（HOFFMANN 251 以下 “eine in unmittelbarer Zukunft folgende Handlung anzukündigen” に相当），4) 個性，習慣:「彼はいつでも遅れる」など，（HOFFMANN，167 以下“Beeigenschaftung” に相当）5) 真理，「地球は太陽の周りを回っている」などであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　5件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Toshifumi Goto	４．巻 Beiheft 30
２．論文標題 Altindoarisch ar/r。und urindogermanisch *h1er, *h2er, *h3er	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Muenchener Studien zur Sprachwissenschaft	６．最初と最後の頁 75-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Toshifumi Goto	４．巻 10
２．論文標題 Bergung des gesunkenen Sonnenlichts im Rigveda und Avesta	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Collection Religions	６．最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Toshifumi Goto	４．巻 1
２．論文標題 Atharvaveda X 10,23: asuusuu' and vas'aa'	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Proceeding of the International Workshop (IVW) 2014 (Kozhikode)	６．最初と最後の頁 496-513
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 後藤敏文	４．巻 23
２．論文標題 シュナッハシェーパ物語試訳（AB VII 13-18 ～ SankhSrSu XV 17-27）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際仏教学大学院大学紀要	６．最初と最後の頁 41-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Toshifumi Goto	4．巻 -
2．論文標題 Snow burns	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Syntaktos. Gedenkschrift fuer H. Hettrich	6．最初と最後の頁 未定（15頁）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Toshifumi Goto	4．巻 -
2．論文標題 YaajNavalkya's Characterization of the Aatman and the Four Kinds of Suffering in early Buddhism	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Festschrift Mislav Jezic	6．最初と最後の頁 未定（23頁）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関